

1102	中国政治論
英名科目名	Chinese Politics
大学名	同志社大学
連絡先	今出川キャンパス教務センター（法学部） TEL：075-251-3511 FAX：075-251-3064
担当教員	浅野 亮（法学部教授）
開講期間	2021年04月07日(水)～2021年07月27日(火) 6講時18時25分～19時55分(毎週火曜日) 休講2021年05月04日（火・祝）
開講形態	前期・春学期 開講曜日・講時 火曜日 6講時
単位数	2 履修年次 3年次以上
会場	今出川校地
授業定員	
単位互換生定員	京カレッジ生定員
試験・評価方法	<成績評価基準> 平常点（出席，クラス参加，発表，グループ作業の成果等）20% オンライン授業では復習を反復しているの点，点数配分は目安であり，適宜出欠をチェックの上，採点の参考とする 中間テスト（中間筆記試験）今回は実施しない 学期末レポート 80% teamsの「課題」を使い，必要な場合e-classを併用する。詳細は授業内に説明する。 基本的な用語や項目や各事象の関係を理解しているか，を見る。 大きな枠組みの中の理解ができていようかどうか，基本的な概念や用語をマスターしているかどうかを見る。 著しい欠席，遅刻，私語などは評価の対象となる。 なお，上記の項目の点数配分は，これらの項目間で配分が可能という前提を受け入れたときに，一つの参考としてあげたものである。
超過時の選考方法	
受講料	
別途負担費用	
その他特記事項	対面ネット併用授業
パッケージ科目	
低回生受講推奨科目	

講義概要・到達目標
<概要> この講義の主要な目的は，中国の態度や行動を理解する上で必要とされる基本知識と枠組みの提供である。 基本的な政治体制，体制変容，対外政策などを中心に，問題別，争点別に分析を進める。とりわけ，改革開放以後の社会変動に伴って起こったさまざまな事象や問題を中心に取り上げて行く。 春学期の「中国政治論」は問題別の分析，秋学期の「中国政治史」は時系列分析と，いわば縦と横に配置している。 「中国政治史」の履修希望者は，「中国政治論」を履修しておくことが望ましい。東アジアや中国の政治をきちんと研究しようとするならば，「中国政治史」と「中国政治論」程度の知識は最低限必要である。また，必須ではないが，政治学の基礎理論に関する知識があればより理解しやすい。 なお，中国の非常に速い展開や変化に遅れないよう努めるので，授業内容は授業計画とは異なるものとなりうる。 指定したテキストの内容をなぞるのではなく，すでにテキストに目を通しているものとして，テキスト刊行以後の学術動向などを紹介しつつ授業を進める。 <到達目標> (1) 中国報道を冷静に理解し，批判できる態度を持つようになること。 (2) 特に，過度に単純なステレオタイプの考えから脱却できるよ

うになること。
(3) 中国政治に関するさまざまな意見や解釈を頭から拒否せず詳しく検討できるようになること。

講義スケジュール
第01回 序論：現代中国分析の視点 連休明けまでにテキスト全体に目を通しておくこと。 第02回 政治：党＝国家体制 第03回 政治：体制変容とその行方 第04回 国家と社会：市場経済化と社会的流動性 第05回 国家と社会：中間層の出現 連休明け以後，テキストを読んできたものとして授業を進める 第06回 テーマ（1）：中央＝地方関係 第07回 テーマ（2）：農村政治 第08回 中間テスト（予定） テキスト全体と，ここまでの授業内容の理解度を見る。 第09回 台湾政治：蔣経国から馬英九まで 第10回 台湾政治：米中台関係と日本 第11回 対外政策：枠組み 第12回 対外政策：「中国の台頭」 第13回 対外政策：国内政治と対外政策 第14回 対外政策：東アジア 第15回 まとめ 上記の計画は，授業で触れる主要なテーマに基づいたものである。授業の一貫性と最新状況の説明の間でバランスをできるだけとりながら授業を進めるので，研究計画の変更はありうる。 中間試験欠席の場合は代替措置を講じる。
教科書
<テキスト> 浅野亮・川井悟（編）『中国近現代政治史』（ミネルヴァ書房，2012），中級以上のレベルのテキストである。なお，テキストに台湾政治論は含まれていないが，可能な限り言及していく。 「新型コロナ」の状況に鑑み，このテキストは必須ではなく，参考程度とする。ただし，読んでおいた方が授業を理解しやすいのは確かである。このテキストを秋学期の「中国政治史」の授業でも使用する。
参考書
<参考文献> ルシアン・ピアノ『中国革命の起源』（東京大学出版会，1989），フランス人研究者による第一級の業績。 毛里 和子『現代中国政治』第2版（名古屋大学出版会，2004），現代中国政治の制度やプロセスに関する優れた入門書，専門書。 Youngnian Zheng, Globalization and State Transformation in China (Cambridge U.Press, 2004). 中国人研究者が英語で発信した研究書。この書籍の出版後，英語で書かれたもっと新しい類書には，王逸舟，胡鞍鋼，秦亞青によるものがある。比較しながら読むと識者の意見の違いや，時期による意見の変化など考えることができる。 Alastair I. Johnston and Robert S. Ross, eds., New Directions in the Study of China's Foreign Policy (California: Stanford University Press, 2006). アメリカ人研究者（政府にも強い影響力があるという）による中国研究書。少し古いが基本的なところはまだまだ十分に役立つ。 フランソワ・ラファルグ『米中激突』（作品社，2008），重要性を増大しつつある米中関係について，フランスからの見方。 David Lampton, The Three Faces of Chinese Power: Might, Money, and Minds (University of California Press, 2008). 中国の台頭を，政治力（文化力を含む），軍事力，経済力の三つの観点から論じたもの。この論点をもっと突っ込んでいきたいなら，中国の影響力増大下に書かれたAaron Friedberg による新しい研究(2011)を探して読むと良い。 国分良成『中国は，いま』（岩波書店，2011），コンパクトな新書で，項目別にその分野の第一人者と目される研究者が執筆している。非常によくできた本で，しかも簡単に入手できる。 Foot, Rosemary and Andrew Walter 『China, the United States, and Global

Order』(Cambridge University, 2011), すでにあげた米国人による研究がやや古いので, 新しい研究の中で目立つものをあげておく。また, 日本の研究者は米国の研究を重視するが, ここで英国から見た分析に触れておくのもよい。

天児慧・浅野亮(編)『中国・台湾』(ミネルヴァ書房, 2009), 現代の中国や台湾に関する教科書として広く使われた。

小原雅博『チャイナ・ジレンマ - 習近平時代の中国といかに向き合うか - 』(ディスカヴァー, 2012), 新書で読みやすいが, 内容は重量級。類書に同じ筆者の『境界国家論』時事通信社, 2012。

青山瑠妙『中国のアジア外交』(東京大学出版会, 2013), 同じ執筆者による, より理論的分析を指向したもの。

劉傑『中国の強国思想 - 日清戦争後から現代まで - 』(筑摩書房, 2013), この書籍の「帯」にもあり, 中国の国家構想の模索のプロセスを概観するのによい。

3年次で, 社会で中国関連業務, また大学院で中国研究をそれぞれ志望するものは, 英語文献や中国語文献にも目を通す努力をあきらめず続けること。(中国語文献は授業内で示す)

中国に対する視点がいろいろあることを知ってほしい。